

# 天皇家の帝王学

小田部雄次

天皇家126代の

帝王学 から  
見えて  
くる

日本の過去・現在・未来

歴代天皇は何を学び、何を考えてきたのか？



天皇家の帝王学

小田部雄次

星海社

265





近現代の天皇の学びやたしなみは、どのようなものであったのか。そして、これからの天皇の学びやたしなみは、どのようなものになっていくのだろうか。本書のテーマはこの2つにある。

近現代とは、近代と現代との2つの時代を示す言葉で、それぞれに違う特徴を持つ。ただ、近現代以前の前近代という時代と比べれば、近代と現代は相似るものも多く、一般には前近代と区分する上で、近現代とまとめることも多い。

日本における近代は明治維新によってはじまる。明治維新とは、慶応3年（1867年）の大政奉還、王政復古の大号令、翌年の戊辰戦争、明治改元にいたる一連の事件と、それ以後の近代国家創設のためのさまざまな改革によって、天皇を中心とした新しい国家体制が創設されていく過程のことである。

この明治維新によって、延暦13年（794年）の平安遷都以来、1000年もの長きを

京都の御所のなかで暮らしていた天皇は、江戸から東京へと改称した近代化されゆく都市に移り住み、御所からも出でて、日本全国を行幸し「人びとの目にふれる天皇」となっていた。そして、武家政権に代わる新しい国家体制と政治制度が整えられ、天皇は国家元首、大元帥、現人神あらひとがみとしての立場と役割を担うようになった。

また現代という時代のはじまりは、昭和20年（1945年）の第二次世界大戦終結後の改革による。この改革によって、天皇は従来の国家元首、大元帥、現人神ではなく、国の象徴、国民統合の象徴としての新たな立場と役割を担うこととなった。

近代と現代で異なる立場と役割を担うようになった天皇は、いつ、どこで、誰に、その役割と立場の違いを学び、そのたしなみを身につけていったのだろうか。また、前近代の天皇と比べて、どのような類似点と相違点が見いだせるのだろうか。

歴代天皇の学びとたしなみを考えるとき、しばしば「帝王学」が話題となる。「帝王学」とは一般に社長など上に立つ者に求められる修養のことを意味するが、本来は帝王になる者がそれにふさわしい素質や見識などを身につける修養のことであった。

かつて世界には数多くの王朝があり、それぞれに帝王がおり、その地位が継承されてきた。日本では帝王という地位身分はなかったが、大王おおきみ、天皇という存在が帝王的なものと

して理解されてきた。つまりは、日本の場合は、大王や天皇がその地位にふさわしい素質や見識などを身につける修養が「帝王学」だったといえる。

しかし、実際の大王や天皇のなかには、必ずしも「帝王学」が備わっていたとは思えない素行が記録されたりもしている。そもそも「帝王学」というものが意識されたのは、大宝元年（701年）に施行された大宝令のところで、東宮（皇太子）に仕える職員に東宮傳とうくわつかが1人置かれ、「道徳を以て東宮を輔たすけ導くこと」とあることにうかがえる。将来の天皇となる東宮の道徳的教育が明文化されたのである。

また「帝王学」の教科書として知られる『帝範』、『群書治要』、『貞観政要』じょうがんせいようなどは、唐の第2代皇帝である太宗の時代以後の編纂によるもので、日本では平安時代以後に流布する。もちろん、それ以前に伝来した仏教や儒教などによる天皇の善政も、広い意味での「帝王学」の成果であろうが、「帝王学」の教科書が宮中の必読書となり、天皇に進講されたりするようになるピークは平安時代以降のようだ。

こうした前近代における「帝王学」は、近代になっても底流として続いていた。西欧思想の流入が激しくなった明治においても、明治天皇は儒学を尊重し、西欧思想へはあまり傾倒しなかった。現代になると、儒学がすたれ欧米思想が広まるが、それでも「帝王学」

といえは儒学思想の範囲にあった。

ただ儒学による「帝王学」に対するものとして、「ノブレス・オブリージュ」がある。フランス語が原義で、「位が高い者は徳が高くあるべし」、つまりは財産、権力、地位の保持には相応の社会的義務と責務が求められるという意味となる。欧州貴族階級のモラルとして近代日本の上層階層、たとえば皇族、華族の道徳として導入され、意識されてきた概念でもある。また、現在でも皇族ははじめ上層階級の品行の基準として語られることが多い。

第二次世界大戦後の現代日本では、天皇は「帝王」ではなく「象徴」というべきで、平成の天皇は「象徴学」という言葉を用いたことがある。その違いは重要だが、「象徴学」も広義の「帝王学」ととらえつつ、これからの新しい時代は、新しい「帝王学」としての「象徴学」が求められるべき時代になっているのだろう。つまりは「象徴」としての「帝王学」がどうつくられているのかが問題となるが、これもまたこれからの社会の変動と、それにとまなう天皇の社会的地位と役割の変化によって、さまざまな可能性が考えられよう。

今日、令和の天皇は平成の天皇の「象徴」としてのあり方を踏襲し、国民に寄り添い、国民とともに歩む皇室の道をめざしている。多くの国民はこうした令和の天皇の「象徴」としての姿勢に、信頼と敬意で応じている。他方、次期の天皇とされる皇嗣家の秋篠宮文ふみ



仁親王は、平成の天皇とはまた違った道があることを示唆している。皇嗣家の長男である悠仁親王の教育においても従来の東宮教育とは異なる新しい道を模索しているようだ。天皇家と皇嗣家という兄弟の「象徴」としての意識のあり方の違いが、今後どのように国民に受容されていくのかは未知数だが、歴代の天皇の学びとたしなみの文脈のなかから、「象徴」としての意識のあり方のあるべき姿の方向性は見えて来るかもしれない。

少なくとも、前近代から近代にかけては国家的事業として時代の最先端の官僚や知識人を総動員して行った東宮教育が、今やそうしたシステムはなくなり、それぞれの宮家の家庭内の自助努力に頼らざるを得なくなっていることは、天皇の学びとたしなみにとって、こころもとなない環境になっているのは確かだろう。

このような天皇の学びとたしなみの歴史を以下の本編でたどっていこう。

第1章

前近代の天皇の

「学び」と「たしなみ」

17

歴代の天皇の代数 18

『古事記』や『日本書紀』の時代の、軍事的長や統一国家の統治者としての天皇 19

「倭の五王」の時代の経典や詩歌、鷹狩 22

律令制度による古代の天皇の学びの整備 25

第 2 章

# 幕末最後の天皇・孝明天皇

51

平安京の天皇たちの学びやたしなみ 34

武家の時代に学芸で存在感を保った中世の天皇 40

江戸幕府との緊張関係の中で旧儀の復興につとめた近世の天皇 46

前近代最後の天皇・孝明天皇 52

天皇の活動を規制した「禁中並公家諸法度」 54

平安時代から長く続いた公家社会 56

公家の家格と家業 57

孝明天皇の立太子節会と春宮坊の側近たち 59

東宮傳・近衛忠熙 61

学士の唐橋在久と桑原為政 63

春宮坊大夫・鷹司輔熙 64

春宮坊権大夫・久我建通 66

春宮坊権亮・烏丸光政 66

春宮坊権亮・正親町実徳 67

孝明天皇の「近習」たち 70

「近習」の日野資宗 71

「近習」の山科言成 72

「近習」の野宮定功と油小路隆光 73

孝明天皇は誰に何を学んだのか 74

読書始め 75

楊弓・聞香 76

絵画・和歌 77

紀伝道御書始 78

公家にとっての明治維新 81

第  
3  
章

明治天皇の学びと人脈

83

死ぬまで京都弁 84

4歳まで母方の祖父の中山忠能家で育った 86

祐宮への愛情 86

孝明天皇の祐宮教育への配慮 89

幕末から明治へ 91

東京での学び 93

福羽美静の進講 97

明治天皇による「帝王学」の講義 97

乗馬や気風を学ぶ 99

明治天皇の侍講たち 100

神道の平田延胤、洋学の加藤弘之 102

明治天皇の「君徳」形成と元田永孚 105

第4章

伊地知正治と御談会と洋学進講 106

副島種臣と「舜堯」への道 107

侍補と天皇親政運動 108

伊藤博文とドイツ型立憲君主制への道 111

健康と道徳が

優先された大正天皇

115

漢詩と和歌の才能があつた大正天皇 116

病弱の皇子 119

明宮の養育掛と「御相手」 120

『幼学綱要』と『片仮名手鑑』 123

御学問所での教育スケジュール 125

はじめて学習院に入学した天皇 127

学習院の起源 129

学習院入学 131

学習院での「御学友」 133

在学中のライフスタイル 134

「御健康の弥増に加はらせられたる事」 137

四谷新校舎時代 139

初等学科卒業と中等学科中退 143

いきいきと全国巡啓した明宮嘉仁親王 145

## 第5章

# 「帝王」と「象徴」の

# 2つの時代を生きた昭和天皇

149

「現人神」から「象徴」になった天皇 150

川村純義の養育 152

足立たかとの出会い 153

学習院に入る 154

幼稚園、初等学科時代の学びやたしなみ 156

初等学科5年級で皇太子となる 158

初等学科時代に高めた動植物への関心 160

東宮御学問所の設置 161

欧州巡遊での学び 164

「宋襄の仁」に見る歴史からの学び 166

『拝謁記』に見る昭和天皇像 168

「人間宣言」の真意 170

「張りぼてにでもならなければ」 172

昭和天皇の和歌 175



第6章

「象徴」としてのあるべき姿を

求めた平成の天皇

179

2022年ぶりの譲位 180

「象徴としてのお務めについて」 181

学習院幼稚園時代 183

学習院初等科時代 186

戦時中の遊びと疎開 188

穂積重遠の進講 191

学習院中等科とレジナルド・ブライス 194

ヴァイニング夫人の来日 197

東宮御教育常時参与・小泉信三 200

美智子妃の支え 202

増えた「公的行為」 203

第  
7  
章

令和の天皇の摸索と

皇嗣家の迷走  
207

停滞する公的行為  
208

両親の教えとみずからの研鑽  
211

「ナルちゃん憲法」  
213

はじめてのひとり旅  
215

両親と学習院  
218

兄宮と弟宮  
220

暗中摸索の時代へ  
224

前近代の天皇の

「学び」と

「たしなみ」

## 歴代の天皇の代数

天皇の学びやたしなみのあり方は、それぞれの天皇の個性によっても異なるが、もっとも重要なのは、その天皇の生まれ育った時代環境によって左右されることだ。すなわち、その天皇の生まれ育った時代の内政や国際関係の状況によって、学びやたしなみのあり方が規定されるのである。近現代の天皇の学びやたしなみについて考える前に、まずはその前提となる歴代天皇の学びやたしなみについて、概観しておこう。

歴代の天皇とは、神武天皇を初代とし、令和の今上天皇を126代とするもので、現在の皇統譜の記載に基づく。

周知のように、歴代の天皇とその代数は、『古事記』や『日本書紀』などの神話や故事、伝承に基づく記載からはじまり、その幾代かの天皇の実存についての科学的根拠は未だに不明な部分もある。また、歴代天皇の代数についても、明治3年（1870年）の修正により39代の弘文天皇の即位が承認されたり、廃帝とされていた47代の淳仁天皇と85代の仲恭天皇の2人の天皇の復帰があった。また、明治44年（1911年）に明治天皇の裁可で南北朝正閏論争が決着して、北朝の天皇を別系統とし、神武天皇を初代として、明治天皇を121代とする系図が成立した。さらに大正15年（1926年）に98代長慶天皇の即位が確認

され、当時122代であった大正天皇は123代となって、124代の昭和天皇、125代の平成の天皇（現上皇）、そして126代令和の天皇へと続く。

39代の弘文天皇は、天智天皇の皇子であり、大友皇子としても知られる。かつては天智天皇の死に際して、天智天皇の弟の大海人皇子と皇位継承をめぐる壬申の乱で敗北して縊死し、その間に即位はなかったとされ、皇位の空白があったとみられていた。現在でも弘文天皇の即位は、皇位の空白を認めなくなった時代の産物として、その即位に疑問を呈する論もある。

### 『古事記』や『日本書紀』の時代の、軍事的長や統一国家の統治者としての天皇

米田雄介編『令和新修 歴代天皇・年号事典』は、初代の神武天皇から126代の令和の天皇までの歴代天皇の時代を5つに区分している。『古事記』『日本書紀』の天皇、「古代の天皇」、「中世の天皇」、「近世の天皇」、「近現代の天皇」の5区分は、通史的な歴史学上の時代区分に準じたものだが、それぞれ神話、古代、中世、近世、近現代と分類される時代に在位した天皇が、それぞれどのような時代的特徴のなかで、どのような「学び」と「たしなみ」をもっていたのかを把握するのにも有効な区分だ。以下、米田雄介編『令和新

修 歴代天皇・年号事典』のほか、皇室事典編集委員会編著『皇室事典 令和版』などから、歴代天皇の「学び」や「たしなみ」について整理してみよう。

まず『古事記』『日本書紀』の天皇』では、初代の神武天皇から32代の崇峻天皇までがまとめられている。この時代の天皇は神話や伝承に基づく天皇が多い。主に国づくりを奔走し、当時の中国や朝鮮との交流もあり、そうした内政や外交のなかで奔走した天皇（当時は大王）の姿が多く描かれる。

この『古事記』『日本書紀』の天皇』も「学び」と「たしなみ」の視点から、初代の神武天皇から14代仲哀天皇、15代応神天皇から32代崇峻天皇に大きく二分できるだろう。つまり、初代から14代までは統一国家の形成とその運営に重点がおかれた時代、15代から32代までは大陸との交流のなかで、『論語』、『千字文』、仏教、鷹狩などの渡来文化が入り、その定着が進んだ時代（いわゆる「倭の五王」の時代）」といえよう。

初代から14代までを概観すれば、初代の神武天皇は日向から瀬戸内海を経て、紀伊に迂回し、熊野から中洲（うちづくに大和）に入った。この間、吉野などを服従させ、畝傍山の東南樞原に帝宅を造り、辛酉の歳に即位した。そして、この神武天皇の東征に功績のあった諸将を褒賞し、くにのみやつこ国造やあがたぬし県主に任命したというのがおおよその流れである。つまりは、神武天

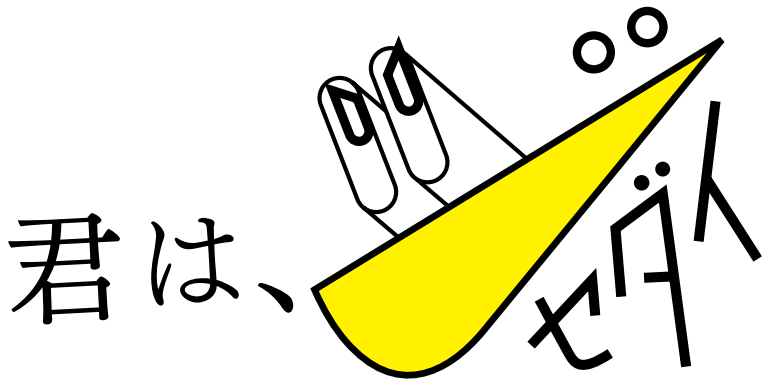
皇は国家統一を進める軍事的長おさであり、統一国家の統治者として大きな役割を果たしたとされる。

以後、2代目以降の天皇は、都の遷都などに尽力するが、これは統治者としての一面といえる。

10代崇神天皇は、三輪山を中心とする政治勢力とする説や、北方大陸系の騎馬民族の後裔であるとする説などもあり、崇神天皇を事実上の初代天皇とする説もある。とはいえ、崇神天皇もまた国家統一の軍事的長であり、統一国家の統治者としての役割が強調されている。

12代景行天皇の皇子が日本武尊で、再叛する熊襲の討伐や東国征討で知られる。ここでも軍事的長、統治者としての姿が強調される。

14代仲哀天皇の皇后が新羅を征圧し、百濟、高句麗も従えたとされる神功皇后である。皇后は帰還した後、九州で応神天皇を産み、異腹の皇子らを滅ぼした。かつては神功皇后を天皇とする説もあり、今日では肯定しがたい説だが神功皇后と卑弥呼とを同一視する説もあった。いずれにせよ、神功皇后もまた軍事的長、統治者として描かれる面が多い。さらには皇位継承をめぐる争いの勝利者としての姿も見える。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ**  
**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**